都留文科大學報

第108号

2008.11.26

編集：都留文科大学広報委員会　〒402-8555　山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学内　☎0554-43-4341　URL：http://tsuru.ac.jp/

●カリフォルニア大学学術交流協定10周年記念　2
盛大だった記念式典…国際交流室専門員　滝口峯子
10年間のあゆみ…国際交流室長　窪田憲子

●セント・ノーバート大学への留学について　4
セント・ノーバート大学への留学について…
国際交流室専門員　滝口峯子
英語と異文化に浸った５ヵ月…
比較文化学科　3年　岡　弥幸

●夏休み学外で学ぶ　……6
「コラボの時間」に参加して
初等教育学科　竹下勝雄教授
フィールドワーク報告　社会学科　平林祐子准教授
トップ・ダウン体制の壮絶な「負の遺産」
ーアウシュヴィッツ・フィールドワーク
比較文化学科　伊香俊哉教授

●教育実習を終えて　……9
“教え育てる”視点を持って…初等教育学科３年　伊関麻里
教育実習で学んだこと…国文学科4年　細井真由美
実習を通して学んだこと…英文学科４年　畠山康子

●講演会だより　……12
国文学科・国語国文学会共催春季講演会
社会学科・地域社会学会共催前期講演会
比較文化学科・比較文化学会共催講演会
ジェンダー研究プログラム主催講演会
第２回特色GPフォーラム

●文大だより
クラブ、サークル活動報告　……17
市民公開講座、県民コミュニティーカレッジ　…18
免許更新制試行事業と現職員教育講座……19
文大名画座／都留市はつらつ鶴寿大学／
公立大学法人都留文科大学の理事長・副理事長
予定者の公表　……20
桂川祭／秋季オープンキャンパス報告／
前期修了者卒業式／教員の昇任について　……21

●編集後記／本 ぶんだい堂……22
編集後記…広報委員会委員　菊池信輝准教授
本 ぶんだい堂

カリフォルニア大学　学術交流協定10周年記念

都留文科大学とカリフォルニア大学が学術交流協定に締結して今年で10年を迎えました。1998年以来、カリフォルニア大学から149名の学生（半年間留学）を本学に迎え、本学からは80名の学生（１年間留学）をカリフォルニア大学に派遣してきました。去る９月27日(土)、交流10周年を記念して、本学において式典・祝賀会が開催されました。

小林義光都留市長の挨拶

今谷　明学長の挨拶

盛大だった記念式典

国際交流室専門員　**滝口峯子**

当日は、本学関係者を始め、都留市長小林義光氏、久保木哲夫元学長、カリフォルニア大学東京スタディセンター関係者、ホストファミリーを引き受けてくださった都留市の方々、過去の派遣生、都留で学んだ元カリフォルニア大学学生ら、130名を越える皆さんが集まってくれました。

また、本学情報センターの協力を得て、今回新しい試みとして、カリフォルニア大学ロサンジェルス校（UCLA)、サンタ・バーバラ校（UCSB）と本学をインターネットで結び、３つのキャンパスで同時に式典に参加できるように映像を中継しました。UCLAには本学国際交流室の小林文子さんが駆けつけ、集まった元留学生たち18名との再会を果たしました。UCSBからは、カリフォルニア大学EAP本部（海外との交流の拠点となっている事務所）のブルース・メイドウエル教授、メアリー・マクマホン東アジア担当部長、ポーレット・グレイズナー学生交換担当部長が参加し、10周年を祝うメッセージを披露してくださいました。カリフォルニア時間では26日(金)の午後７時から９時という遅い時間にもかかわらず皆さんが集まってくださいました。あのような形で太平洋の向こう側とつながることができるなんて、10年前の交流開始時には考えられなかったことです。３会場を映し出した大きなモニターの前で、アメリカ側に集まったカリフォルニア大学生とこちら側のホストファミリーの皆さんとが久しぶりの再会を楽しむ光景も見られました。

下谷地区保存会の皆さんによる
新井神楽の披露

都留会場では、下谷地区保存会の皆さんによる新井神楽の披露もあり、ホストファミリーとの旧交を温めながら、都留市独特のアットホームな留学体験を思い出してくれた人も多かったと思います。集まってくれた過去の派遣生たちは、女性も男性もそろそろ社会の中核として働いている人も多く、これからの活躍がますます期待されます。

留学・学生交流を通して、学生の一人ひとり、市民の皆さんの一人ひとりが、新たな自分を知り、お互いを知り、世界を広げる機会を得られたことが大きな収穫だと思います。これからも両学の交流が益々盛んになりますように、努力を重ねていきたいと思います。

カリフォルニア大学　学術交流協定10周年記念

10年間のあゆみ

国際交流室長　窪田憲子

本学は、1998年にカリフォルニア大学と学術交流協定を結びました。カリフォルニア大学は当時すでに、世界の35カ国、日本においては11の大学と学術交流の協定を結んでおり、学術交流という点から見ても世界有数の大学でした。本学は日本の公立大学としてはカリフォルニア大学との最初の協定校になりました。本学から毎年10名が１年間カリフォルニア大学に留学し、カリフォルニア大学からは年間20名が半年間本学で学ぶという形で協定が交わされました。

この10年間で年平均８人、延べ人数80人の本学の学生がカリフォルニア大学で学んできました。派遣先は、サンタ・バーバラ校、アーバイン校、デイビス校、ロサンジェルス校、サンタ・クルーズ校、サン・ディエゴ校、リバーサイド校、そしてバークレー校と８つのキャンパスにわたっております。１年間のアメリカでの留学体験を終えた学生たちは、たくましく成長し、その経験を活かして、外務省、ＮＧＯ、教職、公務員，企業などそれぞれの分野で活躍しています。

本学からカリフォルニア大学への留学の応募資格は、学内での成績が優秀であるほか、基準値以上のＴＯＥＦＬのスコアが必要とされます。その関門を突破した学生が、書類を提出し、書類審査ののちに、日本語と英語による面接試験を受けます。

カリフォルニア大学からの受け入れについては、学生たちが半年間に本学において、集中的に日本語と日本文化・社会について学ぶ、という点が大きな特徴です。毎年夏と冬の２回、延べ人数150名のカリフォルニア大学生が本学で学んできました。半年間経った後の日本語スピーチコンテストでの学生の日本語能力の進歩は驚くほどのものがあります。

本学の受け入れのもうひとつの大きな特徴として、都留市市民の方の熱心な受け入れが挙げられます。学生一人一人について、ホストファミリーがつき、茶道、生け花、座禅、書道、日本料理などの日本の生活を体験できるように配慮していただいています。また、現代の日本の社会からは、忘れられていっているそば作り、味噌作りなどの貴重な文化行事も行われることがあります。その他のメインイベントとして、信玄公祭り、八朔祭りなど山梨県や都留市の祭りにも参加します。先日行われた八朔祭りには、カリフォルニア大学生が江戸時代の衣裳をつけ、腰元や侍に扮して参勤交替の行列に参加し、テレビのNHKニュースでも取り上げられました。夏の富士登山もビッグイベントになっています。

記念式典でのホストファミリー

カリフォルニア大学

もう一つのすぐれた特徴としてあげられるのが、本学のチューター制度です。本学の学生たちがカリフォルニア大学生一人一人にチューターとして付き添い、勉学から生活の面での相談にのります。このチューターの充実した活躍ぶりは、本学の国際交流の大きな力となっております。

各方面からの協力を得て歩んできた10年間でした。今後の課題として、さらに大学院生の交流や教員同士の研究の交流を活発化したいと考えています。

セント・ノーバート大学協定留学が始まりました

セント・ノーバート大学への留学について

国際交流室専門員　滝口峯子

アメリカ・ウイスコンシン州セント・ノーバート大学（St.Norbert College＝SNC）への新規派遣プログラムが昨年度より開始されました。第一期生12名は平成20年３月から５ヶ月間の研修を無事終了し、去る８月半ば無事帰国しましたのでご報告します。

セント・ノーバート大学は1898年創立という歴史を誇り、アメリカ中西部有数のカトリック系私立大学です。学生数はなんと本学よりも少ない2100名という規模の全寮制リベラル・アーツ・カレッジです。

本学から派遣される学生は、学内の成績、エッセイ、TOEFLスコア（450点以上）、面接の結果を総合的に判断して選考されます。基本的に英語を学ぶ（ESL）プログラムなので、選考のハードルはそれほど高くありません。派遣先でとった授業の単位は本学の卒業単位になります。

留学することで英語力を伸ばすこともちろんですが、様々な国からいろいろな人が集まり、学ぶアメリカで５ヶ月間を過ごすことは、これからの日本社会を背負う若い人々にとって貴重な経験となったようです。

英語と異文化に浸った５カ月

比較文化学科　3年　岡　弥幸

セント・ノーバート大学協定留学第1期生として不安を抱えながら、アメリカに旅立ったのが今年の３月末。日本に帰ってきた今、改めて5ヶ月間があっという間に過ぎてしまったのだと実感せずにはいられない。

疲れた体で寮に着いて、初めてルームメイトに会った時のことは今でも忘れられない。中学生から英語を勉強してきたのにもかかわらず、ルームメイトが何を言っているのか全く分からなく、また何も言うことができなかった。本当に自分の英語力の無さに愕然とした。それから１週間ぐらいは英語に対する自信を失っていたように思う。授業が始まると、大学生となった今では信じられないほど宿題が毎日山ほど出され、毎日宿題の量にうんざりしていた。さらに、アメリカ人は友好的だと思っていたけれど、現実は全く違っていて、自分から進んで話しかけないとアメリカ人と話す機会はおろか、友達にもなれない。この頃の私は、「何とかして友達を作らないと。」と、あせっていたように思う。自分がいかに軽い気持ちで留学に望んでいたことを思い知らされた。しかし、自分から進んで行動したことで、生活が大きく変わったように思う。週に１回はカンヴァセーションパートナーと一緒に食事をしながら話をしたり、チャットやメールをしたりして、言いたいことが言えないもどかしさはあったものの、楽しい生活を送ることができるようになった。

学期が変わりアドヴァンスクラスになると、これまでに増して宿題がいっそう増え、

セント・ノーバート大学正門

セント・ノーバート大学の学生

セント・ノーバート大学への留学

授業内容も難しくなって毎日がとても大変だった。一体、何時間机に向かっていただろうか。毎日教科書を読まされ、その度に自分の意見を考え、エッセイも数え切れないほど書かされて、今でもよくあんなに勉強できたなって思う・・・。でも今では、本当に良い勉強になったと実感する。

学期が変わると、ルームメイトも新しく韓国人に変わり、よりいっそう韓国人との仲が深まった。韓国人は日本人と国民性が似ているせいか、妙に気が合って、一緒にご飯を作って食べたりして本当に楽しい時間を過ごした。英語を学ぶために留学したのに、韓国語にも興味を持ち始め、簡単な挨拶を教えてもらいよく韓国語で挨拶をしていた。韓国人という、国は異なるけれど最高の親友ができたと思う。また、1番好きなESL先生であり、かつアメリカの生活を直接体験させてくれるフレンドシップ・ファミリーになってくれたヤナとその夫のジョンと一緒に過ごした時間は本当に良い思い出になった。一緒に誕生日を祝えたこと、チーズハットを被って写真を撮ったこと、マディソンに旅行に連れて行ってもらったこと、その全てが大切な宝物。フレンドシップと言うけれど、私にとって彼らは私のアメリカでの家族。ラオス出身であるモン人とも仲良くなって、たくさん映画を見たり、食事をしたり、大好きな音楽の話をしたり、シカゴに連れて行ってもらったりして、アメリカ文化を直接教えてくれた。文化の違いや類似点を話すことはとても楽しくて、興味深く、濃い時間であったと思う。セント・ノーバートで出会った、たくさんのかけがえのない人と一緒に過ごした日々は、一生忘れられない。またいつか会いに行きたいと思わずにはいられない・・・。みんな今ではバラバラになってしまったけれど、これからも連絡を取り続けていきたいと思う。アメリカに行ったことで、日本の良い所に改めて気づくことができ、殻に閉じこもらず、自分の意見を言うことの大切さを知ることができた。そして、英語は本当にすごい言葉だと改めて気付かされた。英語を話せるだけで、世界中の人々とコミュニケーションがとれ、友達になれる！そして、自分の世界が広がる。まだ、英語の勉強は十分ではないけれど、この経験をいかした就職ができるように、これからよりいっそう頑張っていきたい。

最後に、留学に行かせてくれた両親、お世話になった先生方、支えてくれた友達のみんな、本当にありがとうございました。また、大切な良き思い出や日本では体験できない経験を与えてくれた、セント・ノーバートの先生方や友達のみんな、本当にありがとうございました!!!!

セント・ノーバート大学

チーズハットをかぶって

夏休み学外で学ぶ　初等教育学科

「コラボの時間」に参加して

初等教育学科教授　竹下勝雄

去る10月17～19日の3日間、神奈川県横浜市の横浜トリエンナーレ2008のメイン会場と隣接する東京藝術大学大学院新港校舎内において、本学初等教育学科美術教室の４年生７名が、環境芸術学会主催の第９回大会「環境・交叉する時間」のメインプログラムとして企画された『共同研究エキシビション「コラボの時間」』に参加した。当大会開催の趣旨である「時間」をテーマに、歴史や伝統・文化・国・地域・情報・映像・音といった様々な要素が介在する環境芸術の新たな可能性を探る試みが繰り広げられた。

そもそも今回の催しは、当学会に所属する美術系大学の教員が指導に携わる学生たちの発表の場として提供され実現したものであり、参加大学は東京藝術大学の２学科をはじめ多摩美術大学、女子美術大学、群馬県立女子大、東海大学、都留文科大学など９大学を数えた。各大学いずれ劣らぬ力作が揃い、その会場を包む熱気は一般入館者を大いに刺激させた。本学の学生は、地域や所属学科の特色を生かして「夢とやすらぎの時間」をテーマに、自分たちが暮らしから学んでいる子どもの頃感じた純粋にワクワクする心と、夢を追いかける大切さを自然の象徴としての木をモチーフに、全身で感じられる“夢想”の世界を立体的に表現した。地上５メートルの高さから帯状に連結させたペットボトルが幹と成り、牛乳パックを原料にした手漉きの紙とカラーセロファンの重なりが葉と成って、限りなく彼等のイメージに近い世界が立ち現れたに違いない。

夏休みを含め半年に及ぶ制作期間中、大学間の打ち合わせの中で幾度も計画変更を余儀なくされ、学生間の意見対立も起きたと思うが、互いを尊重し、共に力を合わせたからこそ生み出せるものがあるのだということを改めて学ぶ機会となったのではないか。またそのように願っている。（参加学生：八桁健、清水健吾、久喜奈美、長友彩香、中井愛、高柳周子、一瀬悠）

作品名「夢とやすらぎの時間」W240×H500×D240cm

夏休み学外で学ぶ　社会学科

フィールドワーク 報告

社会学科准教授　平林祐子

ことしの環境社会学のフィールドワークは、環境社会学ゼミの3年生12人が参加して８月20日から23日まで３泊４日の日程で行った。行き先は「環境先進県」滋賀県である。

初日に全員で「琵琶湖博物館」を訪ねた後、12人はそれぞれの興味関心に従って「琵琶湖・水問題」「菜の花プロジェクトと資源循環」「観光と歴史的環境」の３つのグループに分かれ、見学と聞き取り調査を行った。

「菜の花班」は、地域レベルの資源のリサイクルや効率的利用をテーマに、廃油を自動車燃料にする「菜の花プロジェクト」を全国に先駆けて始めた環境生協をはじめ、これを実践している町や企業を訪ねた。市民レベルの活動に取り組む人たちが、義務感からではなく楽しんで取り組んでいることが印象に残ったようである。

「観光班」は、黒壁で知られる長浜市と、彦根城をもつ彦根市で、歴史的環境や町並み保存と地域の活性化や観光産業との関係を探った。自治体によって、「歴史・環境と観光」の関係の位置づけが異なる事に驚いたという。

「琵琶湖班」は県庁での聞き取りの後さらに二手に分かれた。最初のグループは、琵琶湖周辺におけるヨシの栽培利用や「環境こだわり農業」などの第一次産業の展開と琵琶湖の環境を利用した環境教育を取り上げ、もう一つのグループは水質汚染への地域での対応の事例として守山市の赤野井湾をとりあげ、自治会・JA・漁協・NPOなど多くの関係者を精力的に訪ねた。琵琶湖の水の汚染がそれぞれ立場の異なる人々にどのような影響を与え、意見の違いもあるなかで対処がどのように行われてきたのか、現場の方々の率直な声を聞くことができた。

今回もまた、インタビューに応じてくださった方々はじめ、多くの方々に大変お世話になった。訪問先の多くが都市部にあったので交通手段も基本的に電車やバスを利用し、互いの連絡も容易であったためスムーズに調査を遂行することができ、学生たちも教員も比較的余裕をもって、楽しみながら調査に専念できて幸運であった。

なお、この夏、社会学科環境・コミュニティ創造専攻では他に「地域社会論」「農山村再生論」「環境教育」「都市環境設計論」のフィールドワークが行われた。一部は「環境・コミュニティ創造専攻のぶろぐ」http://blogs.yahoo.co.jp/kankomi_staff　に報告されているので、ぜひご覧いただきたい。また来年度は「地域経済論」「地域環境計画」も加えて７つのゼミがそれぞれ対応するフィールドワークを行い、「現場で考える」学びを実践する予定でいる。

初日に訪問した琵琶湖博物館前で記念撮影

夏休み学外で学ぶ　比較文化学科

トップ・ダウン体制の壮絶な「負の遺産」

―アウシュヴィッツ・フィールドワーク

比較文化学科教授　伊香俊哉

私のアウシュヴィッツ・フィールドワークも今年度で4回を数えた。ナチスによるユダヤ人大量虐殺を考える場合、それ以前のヨーロッパにおけるユダヤ人の存在状況を知ることは重要である。そのため例年、旧ユダヤ人居住区は見学しているが、今年はプラハの旧ユダヤ人居住区をじっくり見る日程を組んだ。そこに残っているユダヤ教会（現在は記念館）では墓地の中に足を踏み入れることができ、独特な墓標を間近に見ることができた。

アウシュヴィッツや他の収容所を訪れれば、そこで行われたおぞましい殺戮の痕に胸がつぶれる思いである。しかし一方で、大量殺戮は決して収容所だけで成立したものではなかったことに目を向けたくなるのである。

ある町からは、「移住」であるとして、列車のチケット代までもユダヤ人に負担させ、実際に切符も渡して、アウシュヴィッツに移送していった。特別列車の編成やチケットの販売に携わった人びとに、罪悪感が生じる余地はほとんどなかったであろう。しかしまさにヨーロッパ全土で、そのような「日常業務」が営まれない限り、数百万人ものユダヤ人が、ヨーロッパ各地の絶滅収容所や強制収容所で銃殺やガス殺や餓死や病死等々で命を落とすこともありえなかったのである。

トップ・ダウン型の巨大な権力機構が頑強に構築され、上からの命令に抗しがたい、あるいは上からの命令を遂行することこそに自己目的あるという感覚が蔓延すると、もはや命令自体の正当性や合理性、道義性ということへのチェック機能はもはや作動しがたくなる。人びとはただ巨大なメカニズムのひとつの歯車と化し、巨大な悪のほんの一部をルーティンワークとしてこなしていく。そこにはほとんど罪悪感もない。

ドイツの独裁者ヒトラーは敗戦を前に自ら命を絶った。日本の独裁者とも称される東條英機は自らの胸をピストルで撃ちながらも、いったんは生き長らえ、その後絞首台へと消えた。ドイツも日本も、自国が生き延びる道はほかにないとして、かたや「千年王国」、かたや「大東亜共栄圏」という誇大な構想をぶち上げ、トップ・ダウンの巨大な国家機構を樹立していった。しかしその両者がもたらしたものは、他国・他民族に対する厖大な加害であり、自国民の多大なる被害でもあった。トップ・ダウン型国家の壮絶な負の遺産と独裁者の末路が、われわれに語りかけてくるのは何なのであろうか。

アウシュヴィッツ第２収容所（ビルケナウ）のトイレ跡でガイドの説明を聞く学生たち。当時収容者が許された“用たし”の時間は数秒ずつであったともいわれる。

教育実習を終えて　初等教育学科

“教え育てる”視点を持って

初等教育学科３年　伊関麻里

初めての教壇

実習先の私の学校は全校86名というとても小さな学校です。私が小学生だった当時と変わらず温かく優しい雰囲気に包まれていてとても懐かく感じました。

実習が始まる前は不安や緊張で押しつぶされそうでしたが、素直で明るく元気な４年生の姿に助けられながら実習を無事終えることができました。

この教育実習で得られたものは、どれもこれも大学の講義では学ぶことのできない大切なものばかりでした。まず、教師の仕事というのは、生みの苦しみの連続ですが、その中に楽しさや喜びがあるということを、自分の体で感じることができました。これは、担当の先生に寄り添い、また、自分で教材研究をし、授業を行うことで気付けたことです。授業一つするにしても、子どもの様々な反応に対応できる様に指導案を十分に練り、準備に時間をかけて授業に望んでも、思うようにはうまくいきませんでした。しかし、その中でも子どもたちが「分かった！」と言ってくれたり、意欲的に授業に取り組んでくれたりすると、涙が出るほど嬉しかったです。こうした経験を通して、教師というのは子どものための努力ならどんな努力も惜しまない、子どもの笑顔を見るためなら頑張れるのだと感じ、とても素敵な職業であると思いました。

実習では、子ども理解にとても悩みました。“仲良く”の視点に加え、“教え育てる”視点を持って子どもたちに接すると、何か起きた時の適切な判断や対応ができず、自分の無力さに気付くとともに、子ども理解の難しさを感じました。しかし、真正面から子どもと向き合い続ければ、こちらの思いが子どもに伝わることを知り、見放さず子どもと向き合い続けることの大切さに気付きました。

この教育実習は、４週間というあっという間の日々でしたが、毎日毎日得たこと感じたことは大変多く、今振り返っても様々なことが思い起こされます。子どもの純粋な心に触れたり、先生方の仕事ぶりを自分の目でみることができ、教師の仕事に魅力を感じ、教師になりたいという思いが以前にも増して強くなりました。この実習で学んだことは、必ずこれからの自分の人生に活きてくると思います。母校で実習ができたこと、子どもたち先生方との出会いに深く感謝しています。

４年生のみんなと

教育実習を終えて　国文学科

教育実習で学んだこと

国文学科４年　細井真由美

私は母校の中学校に教育実習に行かせていただきました。４週間の実習期間を経て感じたことは、いかに生徒主体の授業を行なうことができるかということです。

私は中学２年生の３クラスを中心に、国語を教えてきました。私が担当したクラスでは、半数の生徒が国語嫌い、または国語は苦手といった生徒でした。発問をしても、自分の答えが正解なのか自信が持てないため、分かっていても発表できない生徒の姿や教室で間違うことが恥ずかしいという生徒の姿が窺えました。私はクラスの現状を見て、この４週間で生徒たちに、自己表現力をつけさせることを目標にしました。国語は、読解力や表現力が求められる科目ですが、知識としての国語だけではなく、『生きる力』をつけるために国語を学んでほしいと考えました。

そこで、私はまず、発問の仕方を工夫することにしました。私自身、中学生の頃、国語の時間は発表することが苦手でした。登場人物の気持ちを聞かれた時などは、なかなか答えられず、うつむいてしまうこともありました。自らの経験も含め、どのような発問をすれば、生徒が自信も持って発表できるかということを念頭に置き、授業展開を行ないました。実践としては、生徒がすでに理解している内容や前の時間に学習したことも、「この作品の作者は誰？」「いつの時代に成立したか？」（『枕草子』の学習にて）といったように、生徒が自信を持って答えられるような問いかけをするようにしました。このように、生徒に自信をつけさせるような実践を繰り返し行なっていくと、実習２週目から授業中の生徒の表情が変化していることに気づきました。そして、国語が苦手と言っていた生徒が、毎回授業中に挙手して発表するようになりました。「教室は間違うところだ」ということを生徒たち自身が思えるようになり始め、誰かが間違えると、すぐに別の子が教えてあげ、クラス全体で考えるようになりました。少しずつ自己表現力が生徒についてきました。しかし、それは読解力をあまり必要としない発問だったからであって、発問内容を少し難しくすると、生徒は黙ってしまいました。それからは、考える時間を増やして授業展開を行ないました。すると、実習後半になってくるにしたがって、生徒の表情が少しずつ変わってきました。

私は４週間の教育実習を通して、改めて教えるということの難しさを感じました。授業を行なっていると、つい教師主体の授業になってしまうこともあり、毎時間反省点がありました。しかし、初めは国語を苦手とする生徒が半数だったのが、最後に生徒からもらった色紙に、「先生の国語の授業は分かりやすかったです。」「国語が少し好きになりました。」とコメントしてくれた生徒がいて、４週間の実習期間が私にとって、すごく輝いた期間であったことを実感しました。

中学校は生徒指導も部活動指導もありますが、やはり一時間の授業を大切にし、教えるという立場になっても、常に自分が学んでいるという意識を忘れずに、生徒と向き合っていくことの大切さを感じました。今回の教育実習で学んだ経験を、今後活かしていこうと思います。

実習先のクラスの生徒たちと

教育実習を終えて　英文学科

実習を通して学んだこと

英文学科４年　畠山康子

母校の高校に教育実習に行く前は、生徒と上手に接することができるかどうか、授業をきちんと行うことができるかどうかなど不安でいっぱいでした。でも、先生方に教えて頂いたり、他の教育実習生と支えあったりして、乗り越えることができました。

実習期間が２週間と短かったので、初日から授業を見学すると同時に、授業も担当しました。まず見学して驚いたことは、生徒が自分から手を挙げて答えていることでした。私が高校生の時は当てられて答えていたので、積極的に生徒が授業に参加している雰囲気がいいなと思いました。でも、同じ生徒ばかりが答えたり、当てられないことで授業に参加しない生徒がでたりする可能性もあるので、悩んだ結果、私も授業をするときは受け身の授業にならないことを目標に、こちらの“volunteer”の一声で生徒に答えてもらう方法にしました。

実際に授業を担当してみると、答えがすぐ出るクラスとそうでないクラスがあり、どのようにヒントを出したらよいのか悩みました。また、授業をしていても、生徒が訳することに集中するあまり、教科書ばかり見て、顔を上げることが少なかったので、大学の講義で学んだOral Interactionを使って、教科書を閉じたまま、絵を使って内容へ導入してみました。すると、生徒が黒板の絵を見るために顔を上げて、私の話に集中してくれたので、よかったと思いました。指導教官の先生のご指導により、授業を自由に使わせて頂いたので、やってみたいことに挑戦することができました。授業の他にも高校総体があったので、学校での応援練習や壮行式に参加するだけでなく、実際に開会式や大会の応援に行くこともできました。普段の先生の仕事以外のことを体験できたことは貴重だったし、選手としての生徒の頑張りを見ることもできました。

ただ一つ残念だったことは、たくさんの生徒と話すことができなかったことです。話しかけてくれる生徒もいるけれど、高校生は友達と一緒にいることが多く、教育実習生の私もなかなか近付けない雰囲気でした。初めは冷めているのかなと思ったけれど、指導教官の先生から、生徒たちはシャイなだけで本当は話したいと思っているということを、教えて頂いて安心しました。日にちが経つにつれて話をする生徒も多くなったので、もっと学校にいることができたら、もう少し仲良くなれたかなと思います。初めは緊張や、不安ばかりの教育実習だったけれど、終わってみるとあっという間でした。教育実習を通して自分が高校生だった頃と、今の学校の違いや、模擬授業ではなく、実際の生徒を相手にする授業の難しさなど、多くのことを学ぶことができました。

担当したクラスの生徒からの寄せ書き

講演会だより　国文学科・国語国文学会共催春季講演会

講師：芳賀　徹 氏

夏目漱石の美しい小島

―『永日小品』の「蛇」と「昔」の読解の試み

国文学科教授　阿毛久芳

講師の芳賀氏

6月25日（水）午後1時10分から、国文学科・国文学会共催による春季講演会が行われました。講師は岡崎市美術博物館館長の芳賀徹氏で、演題は「夏目漱石の美しい小島」でした。『吾輩は猫である』から『明暗』に至る漱石の長編小説の連峰に対して、『夢十夜』『永日小品』などの短編小説群を「美しい小島」と呼びたいとのことから芳賀氏は話を始められました。漱石の短編集を、別名「夏目漱石の実験工房」とも呼び、漱石はこれら短編集によって書く可能性を手探りしているといいます。

『永日小品』には、漱石のロンドン留学中の体験を書いた「昔」と、唯一の師というべき人を書いた「クレイグ先生」も収録されていますが、魯迅はこの「クレイグ先生」を『現代日本文学選』に中国語に翻訳して収めているという興味深い話を芳賀氏はされました。永い春の午後の中で書かれた小品で、蘇ってくる子供、少年時代、留学中のことが記されているというのです。

「蛇」には漱石が四、五歳のころ住んでいた内藤新宿の回想が入っているとし、「内藤新宿新屋敷辺之図」（「江戸切絵図」）における鬼王稲荷社や、広重の「四谷内藤新宿」（『名所江戸百景』）の三頭ぐらいの馬が、みんなお尻を向けている面白い構図の絵を示し、この小説の地理関係をヴィジュアルに示しました。雨の中、魚を取りに行く叔父さんに子供はついて行きますが、叔父さんはつかんだ蛇に憑依されて、「覚えてゐろ」と声を発してしまう。「叔父さん、今、覚えてゐろと云つたのは貴方（あなた）ですか」と子供がたずねても、誰だかよくわからないと答える、怪談めいた話。一方「昔」は明治三五年十月に漱石がスコットランドのピトロホリを訪問した体験記で、「安々と寂びてしまう」、「世に熟れた顔を揃え」た人々がいる桃源郷を発見した話です。

芳賀徹氏の講演の面白さは、漱石の文を声に出して読むことの面白さに裏付けられたものでした。朗読後、コメントをはさみ込みながら講演はすすみました。味読することの醍醐味が伝わってきました。漱石の魅力にふれることのできる喜びを感じさせてくれる講演でした。

講師紹介

芳賀　徹（はが・とおる）

1931年生まれ。比較文学・近代日本比較文化史専攻、文学博士。東京大学教養学部教授、国際日本文化研究センター教授、大正大学教授、京都造形芸術大学学長を経て、現在、岡崎市美術博物館館長。

著書『大君の使節』（中央新書1968年）、『渡辺崋山―優しい旅人』（淡交社1974年、のち朝日選書）、『みだれ髪の系譜』（美術公論社1981年、のち講談社学術文庫）、『平賀源内』（朝日新聞社1981年、サントリー学芸賞）、『絵画の領分―近代日本比較文化史研究』（朝日新聞社1984年、大佛次郎賞、のち朝日選書）、『与謝蕪村の小さな世界』（中央公論社1986年、のち中公文庫）、『詩歌の森へ　日本詩へのいざない』（中公新書2002年）他、単著、編著多数。1997年、紫綬褒章。

講演会だより　社会学科・地域社会学会共催前期講演会

反貧困 ―「すべり台社会」からの脱出

講師：湯浅　誠 氏

社会学科教授　進藤　兵

「さきほどまで、Ｓ社（不動産業者）の『貧困ビジネス』を訴える記者会見を霞ヶ関でしていました」――７月16日夕刻、２号館101教室で開催された地域社会学会主催前期講演会で、湯浅　誠氏（NPO法人自立生活サポートセンター「もやい」事務局長、「反貧困ネットワーク」事務局長）は、静かな口調で、こう語り始めた。会場では、想定を大幅に超えて130名をこえる在学生・教員そして近隣市民たちが、講演に聞き入る。

敷金０・礼金０を売り物に、非正規雇用の若者や仕送りで暮らす学生むけの賃貸アパートを展開しているＳ社は、一日でも家賃支払いが遅れると多額の「違約金」を取るなど、借地借家法違反の「貧困ビジネス」を行っているというのだ。続けて、家賃未払いから多重債務に陥っていく事例や、労働者派遣会社Ｇ社による違法な中間搾取の事例、「ネットカフェ難民」の事例が紹介される。こうした「貧困化」の社会的背景として、高卒・大卒新卒者労働市場の縮小、非正規雇用率の増加、労働者・消費者の権利の軽視が語られる。

講演会に先立って、地域社会学会では、５月に各ゼミからの代表で構成される協議会で講師を決め、６－７月には湯浅氏の著作を読んで検討する事前学習会を行うなど、準備を進めてきた。湯浅氏も、文大生の背景を踏まえて、地方都市や農村部での貧困問題、例えば若者や高齢者の経済犯罪、深夜のコンビニや牛丼屋ではたらく中高年層・外国人、北九州市役所の「生活保護水際作戦」による餓死者問題を、具体的に紹介された。

他方で、正社員層は決して「勝ち組」ではなく、Ｇ社正社員や自治体の生活保護担当職員の具体例を紹介しながら、長時間労働や過労うつ、過労死の事例が増えていることを、湯浅氏は強調した。「私たちの日常風景の中に『勝ち組』はいないのではないか」と述べ、かつての中間層が分厚い「ちょうちん型社会」から、富裕層と生活保護世帯が増加する「砂時計型社会」への転換点に、今の日本社会は立っているとして、貧困という事態を「私たちの問題」として受け止め、「世直し」の必要を訴えた。そのためにも、とかく対立しがちな正社員層と非正規雇用層、中高年・高齢者と若者が、お互いをよく知り、お互いの生活条件を改善していく「連帯」の重要さを強調されたのが、印象的であった。

講師の湯浅氏

約１時間の講演の後、会場からの質問にも、湯浅氏には丁寧に応答された。また「川藤」での夕食会にも参加され、10数人の学生とともに熱心な議論が続いた。

会場で回収したアンケートでは、「内容的にも分かりやすく、聞き取りやすい講演でよかった」「すごく考えさせられた」「本当にリアルでした。私も今、派遣会社を通してアルバイトをしています」「人間らしく生きていくことがこんなに困難な社会であることを、もっと学ぶべきだ」「貧困はその人たちだけの問題ではなく、社会全体でとらえる必要を知った」「私たちが社会を良くしていかなければと思った」などの声が寄せられた。

講師紹介

湯浅　誠（ゆあさ・まこと）

NPO法人自立生活サポートセンター・もやい事務局長、反貧困ネットワーク事務局長他。

著書『反貧困』（岩波新書、2008年4月）、『貧困襲来』（山吹書店、2007年）、『本当に困った人のための生活保護申請マニュアル』（同文館出版、2005年）など。

東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。1969年生。

講演会だより　比較文化学科・比較文化学会共催講演会

エコツーリズムで何が出来るか

講師：広瀬敏通 氏

講師の広瀬氏

比較文化学会事務局　比較文化学科４年　室万里奈

2008年7月9日、「エコツーリズムで何が出来るか」というテーマで比較文化学科・比較文化学会共催講演会がおこなわれました。講師としてお招きしたのは、日本エコツーリズムセンター代表理事の広瀬敏通氏です。

広瀬氏は日本の自然学校の草分け的存在であるホールアース自然学校を1982年に開校し、エコツーリズムによる地域づくりに取り組んでいらっしゃいます。そのほかアジア各国で国際協力活動をおこない、海外でも幅広く活動されています。講演では、地域においてエコツーリズムが果たす役割や、その現状についてお話をしていただきました。

エコツーリズムの定義は国や地域、団体によってさまざまに異なります。広瀬氏は、ご自身の考えるエコツーリズムを「環境と観光の持続的で調和ある発展」「地域の誇りを再生する『生き方と暮らし方』の実現」をめざす考え方として紹介してくださいました。エコツアーは、その理念のもとでおこなわれる、「その地固有の自然文化資源を活用した環境保全型の旅行」です。例としては、トレッキングやカヌーなどのアクティブな体験活動、田舎での暮らしを体験する里山活動があげられます。

今回の講演で印象に残ったのは「人は人に感動し、心を動かされる」という言葉です。「旅の思い出は人情や風情にある」というのは普通の観光旅行にも当てはまりますが、エコツーリズムにおいては特にこれが顕著なのかもしれません。エコツーリズムでは、ガイドや旅行者はもちろんのこと、地元住民や地元行政まで、地域全体が関わりあいます。それぞれの立場の人が出会うことで、人にも地域にも変化が起こります。指導者育成に力を注ぐ広瀬氏は、「エコツーリズムでは施設やインフラよりも人を育て磨くことが肝心」と力強く語ります。ものに頼らない観光であるからこそ、人の魅力が強く求められるのだろうと感じました。

講演会後の懇親会には多くの学生が参加し、さかんに意見交換がなされました。広瀬氏は富士山麓で多くのエコツアーをなさっており、富士山のゴミ問題や世界遺産登録については特に熱い論議となりました。環境と観光、地域について、自然豊かな都留に住む自分に引き寄せて考える機会となった講演会でした。

講師紹介

広瀬敏通（ひろせ・としみち）
日本エコツーリズムセンター
　代表理事
ホールアース自然学校　代表

熱心に講演を聴く学生

講演会だより　ジェンダー研究プログラム主催講演会

講師のマラシュリ・ラル 氏

インドの女性たち
― 幼児婚・ダウリ・寡婦問題

講師：マラシュリ・ラル 氏　通訳：滝口峰子 氏

ジェンダー研究プログラム運営委員会　大辻千恵子

6月18日に行われた講演会は、100人以上が参加し、大盛況に終わることができました。今回は、英文学科の大平先生のご尽力と大学からの後援により、インドのデリー大学からラル氏をお迎えすることができました。デリー大学大学院英文学科の教授またデリー大学南キャンパスの副学長でもあり、インドでジェンダー研究の最先端に立ち、現実のインド女性の地位向上にむけても積極的に活動されておられる氏のご講演は、インドの女性が私たちが想像する以上に過酷な状況で暮していることを衝撃的に提示されました。ご講演がインド女性に向けて３年間続けられた研究調査の結果に基づき、その質問事項が被調査者の微妙なニュアンスもつかみ取れるように工夫され、インド女性自身が感じ、体験していることを重視したため、インド女性の生の声がよく聞こえてくるものでした。

識字率は、2001年の調査で男性の76％に対して女性は54％。年に1200万人の女児が生まれてもその４分の１が15歳の誕生日を迎えられないこと、この結果は「胎児のうちに女児を見分けて堕胎する」という意味のDEMARUという造語までも生み出していること；女児がレイプや性的虐待の標的になっていること（記録された被害女性の5分の１が10～16歳、25分の１が10歳未満）；幼児婚や早婚の慣習が都市や地方に関係なく依然強く残り、花嫁は値踏みされること；女性は結婚し家庭に属するもの、結婚すれば夫に従属するもので、親は娘に教育は不要だとみなしていること、また夫に先立たれた女性は若かろうと社会的に抹殺され、「社会的死」を迎えなければならないこと；女性の家庭役割は絶対的で、たとえ高学歴の女性でも無職であること（デリーの例）；1992年の憲法改正で、女性議員数は全体の33％は占めるように規定されたものの、依然、女性議員数が非常に少ないことが次々と紹介されました。

調査された事例は、若い女性がこのような現実をどう受け止めているのか、明らかにしています。「結婚したいのは軍人で、ダウリなどお金を求めない人がいい」、「結婚したら息子しか欲しくない。女の子が生まれたって、その子を待っているのは虐待と持参金目的の殺人だけだもの」、「掃除屋の家庭に生まれた私の人生は地獄だ」・・・。

会場の様子

しかし、デリーでは最近コールセンターで男性とともに夜間シフトでも働く若いシングル女性や、またベンガル州の寡婦ホームには従来とは違う寡婦も姿もあります。何よりも興味深かったのは、氏が西洋的なフェミニズムではなくインド独自の、家族や親類、地域ともつながっていくフェミニズムを目指すと強調されたことです。活発な質疑応答がおこなわれ、なかには講演では触れられなかったサティー（寡婦殉死）にも話が向かいました。会場でのとても真剣な学生さんたちのまなざしが印象的でした。

講演会だより　第２回特色GPフォーラム

テーマ

地域を基盤にした教師教育改革
― フィンランドと日本

平成20年度特色ＧＰフォーラムが行われました

初等教育学科教授　佐藤　隆

11月7・8日の二日間にわたり、特色GPフォーラムが、「地域を基盤にした教師教育改革－フィンランドと日本」をテーマにして行われ、二日間で延べ200人の参加を得る盛会となりました。第一日目冒頭のペンティ・ハッカライネン（オウル大学）教授の報告は、参加者にとってじつに刺激的なものでした。今回の（とくに学外からの）参加者の多くは、フィンランドのPISAでの成績の理由を知りたがっていたのでしょうが、その期待はよい意味で大きく裏切られました。ハッカライネン教授は「フィンランドのPISAでの成功に何の意味があるのでしょう？学力とは何か、学習とは何かを問いもせずに、PISAの結果のみをクローズ・アップすることほどばかげたことはありません」と述べて、日本でのフィンランド・ブームの批判を行いました。また、彼の目から見ると、現在のフィンランドの教育は、〈子どもと子ども〉、〈子どもと教師〉が生み出す相互のダイナミズムを軽視しており、本来の意味でのナラティブ（聞き取り－語る：物語）の基盤に欠けていると、きびしい批判を展開しました。その上で、だからこそ、これからの教師には物語的学習の理論的・実践的なパースペクティブと学習集団内部の相互のコンタクトスキルが求められていると述べ、その点についての詳しい説明が行われました。

講師のミルダ・ブレディクト 氏

また、午後には彼とともに教師教育を担当しているミルダ講師による、オウル大学での取り組みが具体的に紹介され、物語学習と教師教育の関係についての議論が、多くの参加者に共有されました。

二日目は、フィンランドからの報告者をまじえて、日本の教師教育と学校改革が目指すべき方向についての議論が行われました。はじめに、この数年、教職大学院の設置や地域を基盤としながら学生の学習と実践のフィールド開拓を精力的に進めてきた福井大学の実践を寺岡英男教職大学院研究科長から報告をしてもらいました。また、その典型的な事例の一つとして至民中学校の学校改革の様子を牧田秀明教諭からの報告も受け、地域に開かれた、そして子ども自身が学習の担い手として動き出す実践と、そのために教師に求められる力量についての検討もあわせて行われました。それに続いて本学の田中孝彦教授からは、本学のSATの取り組みや臨床教育学専攻の意味について語られるとともに、〈傷つく子ども・学生・教師〉の戸惑いや〈困り感〉に即した教師教育の新たなプログラムの必要性についての提起がなされました。

講師のペンティ・ハッカライネン 氏

二日間の討論を通じて、教師や教師をめざす学生が、個人の力量を競うようなかたちで実践力を身につけるのではなく、協働するセンスやそのことの意味を理解すること、子どもや保護者、そして地域の声を練り上げ、文字通りナラティブな関係をどう作り上げるのかが課題となっていることが確かめられました。

講演会告知

文大だより

本学陸上競技部　日本選手権 女子４×400mリレーで銅メダル獲得

10月24日～26日の３日間、新横浜の日産スタジアムで開催された第92回日本陸上競技選手権リレー競技大会の女子4×400mリレーにおいて、本学陸上競技部が３位入賞を果たし、銅メダルを獲得した。

昨年の３位を上回る成績を目指して出場した本大会であった。北京五輪代表メンバーを擁するナチュリル、福島大学といった強豪チームによく善戦し、アンカー勝負にもつれ込む展開となったが、惜しくも３位となった。決勝のメンバーは、第1走者鈴木千夏（初教１年、三島北高出身）、第２走者小澤洋子（初教３年、静岡市立高出身）、第３走者長倉由佳（初教3年、静岡市立高出身）、第４走者上田千暁（初教３年、駿台甲府高出身）であった。

４×100mリレーメンバー
（左から水谷、鈴木、長倉、上田）

また、4×100mリレーにおいても、第１走者水谷友紀（初教３年、桑名高出身）、第２走者上田千暁（初教３年、駿台甲府高出身）、第３走者長倉由佳（初教３年、静岡市立高出身）、第４走者鈴木千夏（初教１年、三島北高出身）で臨み、昨年の７位から順位を一つ上げ６位入賞を果たした。

表彰式で笑顔の4×400mリレー４選手
（上段左から長倉、鈴木、下段左から上田、小澤）

全国国公立大学空手道選手権女子個人形で本学空手部萩原選手が２連覇

10月26日(日) 和歌山県立体育館で行われた「第30回全国国公立大学空手道選手権大会」において、本学空手部荻原知佐（初等教育学科２年）さんが女子個人形で優勝しました。本大会での優勝は昨年に続き２回目となり、今後とも活躍が期待されます。

優勝した荻原知佐選手

本学合唱団「全日本合唱コンクール全国大会」出場

金賞を受賞した関東支部大会（市川市文化会館）

９月20日(土) 千葉県市川市文化会館で行われた「第63回全日本合唱コンクール関東支部大会」において本学合唱団が金賞を受賞しました。この大会で１位となったことから、11月22日に岡山県岡山シンフォニーホールで行われる「第61回全日本合唱コンクール全国大会」へ10年ぶりに出場することとなりました。

文大だより

市民公開講座開催される

４人の講師がそれぞれの視点で語る

今年の市民公開講座は本学比較文化学科の全面協力により『東アジアと日本－ヒトと文化の交流の現在－』を総合テーマにし本学附属図書館４階学習室において全４回シリーズで行われます。

講座では、東アジア特に中国、台湾、韓国といった近隣諸国と日本の関係を、古典芸能、現代文化、戦争の記憶、越境と交流という各テーマで取り上げ、日常のニュース等では取り上げられない関わりを、文化・ヒトの交流という視点から行います。第１回11月12日(水）は山本芳美准教授による「韓流vs華流－ブームをささえる台湾の動向とともに－」、第２回11月19日(水）は笠原十九司教授による「戦争記憶の対話と和解を目指して－日中韓３国共通歴史教材『未来をひらく歴史』の試み－」、第３回11月26日（水）は白栄勲氏（本学比較文化学科非常勤講師）による「中日韓三国関係の中の中国朝鮮族」、第４回12月３日(水）は鳥居明雄教授による「日本の古典芸能とアジア－能にみられる中国文化－」、の各テーマでの講演となります。

第１回講師の山本芳美准教授

県民コミュニティーカレッジ分担講座

大学コンソーシアムやまなしが主催し地域交流研究センターが共催する「県民コミュニティーカレッジ講座」の地域ベース講座が今年も10月、11月の２ヶ月に渡り本学２号館で開催されました。今年は「“自然の力”をまちの力に」を総合テーマとして「自然の力」（土・水・風・森・木）を活用した「市民参加」のまちづくり・環境づくりについて、各地の先進的な実例と経験を紹介した全５回のシリーズの講義でした。

各テーマ及び講師は次のとおりです。

平林祐子准教授によるスクリーンを使った講座

第１回　10月９日(木)
テーマ：「土の力」のつなぎ方
－食の有機的なリサイクルシステムを目指して－
講　師：田村孝次（カントリーレイクシステムズ代表）

講師の田村孝次 氏

講師の渡辺豊博教授

第２回　10月16日(木)
テーマ：「水の力」が市民を結ぶ
－水環境をめぐるグランドワークを通して市民力を醸成した物語－
講　師：渡辺豊博（本学社会学科教授）

第３回　10月30日(木)
テーマ：「風の力」で村をつくる
－自然エネルギーを活用したまちづくり－
講　師：平林祐子（本学社会学科准教授）

第４回　11月13日(木)
テーマ：「森の力」がまちを守る
－水資源または環境保全としての森と人の関係－
講　師：泉　桂子（本学社会学科講師）

第５回　11月20日(木)
テーマ：「木の力」が子どもを育てる
－木育・森林環境教育のススメ－
講　師：高田　研（本学社会学科教授）

文大だより

平成20年度都留文科大学現職教員教育講座で免許状更新講習プログラム開発委託事業の予備講習を実施

平成20年度の地域交流研究センター主催の現職教員教育講座は、７月30日から３日間の日程で本学２号館101教室を中心に開催され、今年は従来の10年研修を前半２日間のみとし、後半の２日間は平成21年度から導入が決まっている教員免許状更新講習の予備講習として文部科学省の認可を受けて実施しました。

この講座は例年夏季集中講座として、教師の子ども理解をめぐる問題を中心に行っており、今回も『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで、ひとりひとりの子どもの理解をベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることを考える講座を実施しました。山梨県内はもとより近隣都県からも多くの現職教員の方々が参加し盛況に開催されました。

今年の特徴としては、来年度から始まる免許状更新講習の教科指導等の予備講習を並行して開催し、この部分では文部科学省の免許状更新講習プログラム開発委託事業の採択も受けた講座として実施しました。予備講習部分では各講習で筆記試験も実施したため、通常の講演のみの講座とは異なり、受講者の緊張感が伝わる会場の雰囲気となりました。また、試行的に東桂小学校の協力によりテレビ会議システムによる遠隔授業も行われ、本学と東桂小学校の２会場で同時に講習が実施されました。この遠隔授業については、その実施手順や問題点などを文部科学省に報告し、後日先進的取組み事例として全国に発信される予定です。

西本勝美地域交流研究センター長の講座説明

開催日程については下記のとおりでしたが、参加者の事後アンケートによれば、次年度からの免許状更新講習の中核を担う役割として、また、昨今の教育問題を独自の視点から解決する糸口を探る場として、特に現職教員の方々からは本学に期待される声が数多く寄せられました。

東桂小学校との遠隔授業の様子

【第一日目】７月30日(水) 現職教員教育講座

現職教員教育講座	**『総論１　学校の現状と課題』** 講師：西本勝美（初等教育学科教授）
	『総論２　子ども理解と生活指導』 －現実を支えること、内面をささえること－ 講師：筒井潤子（初等教育学科講師）

【第二日目】７月31日(木) 現職教員教育講座・免許更新講習

現職教員教育講座 兼免許更新講習	**講座A:「読解力」を高める授業づくり** 講師：鶴田誠司（初等教育学科教授）
	講座B: 惹きつけ、つなげる授業づくり 講師：不破　修（初等教育学科非常勤講師）

【第二日目】７月31日(木) 現職教員教育講座・免許更新講習

免許更新講習	**講座C: 子どもの課題意識と問題解決能力を育む** 講師：木下邦太朗（初等教育学科非常勤講師）
	講座D:〈書くこと〉を取り入れた〈読むこと〉の指導 講師：牛山　恵（国文学科教授）
	講座E: 第二言語習得研究から英語教育を考える 講師：奥脇奈津美（英文学科講師）
	講座F: 経済データを利用した学習指導 講師：村上研一（社会学科講師）

文大だより

文大名画座の開催

第６弾　日本の名画・監督シリーズ（11月～12月）

講師の稲垣孝博教授

開催場所：都留文科大学２号館101教室
開催時間：午後６時30分から

今秋で６シリーズ目となる「文大名画座」は、本学教員のお薦め映画を上映し、教員自身がその作品への思いを語る公開講座で、市民からは大学の教員を身近に感じられ、懐かしい映画が市内で見られるとして親しまれています。

今回は、「日本の名画・監督シリーズ」として小津安二郎と山田洋次の監督作品を上映し、中でも山田洋次監督の「学校」は本学初等教育学科の田中孝彦教授が監修に携わっていたことなどの解説も行われます。この名画座の開催スケジュールは次のとおりです。

１１月１１日(火)
作品名　『東京暮色』小津安二郎監督
解説者　稲垣孝博（英文学科教授）

１１月２５日(火)
作品名　『幸福の黄色いハンカチ』　山田洋次監督
解説者　柳　宏（初等教育学科教授）

１２月２日(火)
作品名　『学校』山田洋次監督
解説者　田中孝彦（初等教育学科教授）

１２月９日(火)
作品名　『家族』山田洋次監督
解説者　笠原十九司（比較文化学科教授）

都留市はつらつ鶴寿大学で本学講師講演

菊池信輝准教授の講演を熱心に聞く受講者

10月24日(金) 都留市文化会館で行われた「都留市はつらつ鶴寿大学」に本学社会学科菊池信輝准教授が社会経済講座の講師として約30名の受講者を前に講演しました。

この鶴寿大学は、都留市中央公民館が主催する都留市内の高齢者を対象とした生涯学習事業ですが、公民館担当者によれば本学が取組んでいる公開講座などの地域貢献事業とのリンクも視野に入れ、これからも本学の知的資産を積極的に活用していきたいとのことでした。

都留市９月議会において理事長・副理事長予定者を公表

西室陽一 氏

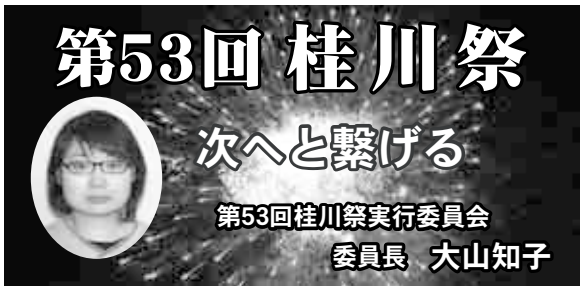
９月定例議会において小林義光都留市長は、平成21年４月に設立する公立大学法人都留文科大学の理事長予定者と副理事長兼学長予定者を公表しました。

理事長予定者は、都留市出身で元東京ガス(株)代表取締役専務の西室陽一氏（80歳）で、これまでも都留文科大学検討委員会及び準備委員会の両委員長を勤めています。

また、副理事長兼学長予定者は今年４月から本学学長に就任した今谷明氏（66歳）が、副理事長の職務を兼ね引続き行う予定となりました。

このことから、平成21年４月１日付けで都留市長は理事長を、理事長は副理事長兼学長を任命する予定です。

文大だより



今年の桂川祭は10月31日～11月2日の日程で行われました。今年は３日間とも晴天に恵まれ、多くの来場者の方に楽しんで頂けたのではないでしょうか。

第53回桂川祭のテーマは「破顔一笑」です。その言葉の意味のように、桂川祭を皆が笑顔で過ごせるようにという願いを込めたテーマです。今年は本当に天候に恵まれ、特設ステージでの桂川企画・学生パフォーマンスなどは、どれも盛り上がり、好評のうちに終わりました。また、テント・教室での各団体の模擬店や展示も盛況でした。

今年の桂川祭は土台作りの年でした。年々実行委員の数が減少し、桂川祭を運営していくのも大変な中、昨年は作れなかったゲートを作ったり、企画数を増やしたりと、多くの事をしてきたつもりです。決して成功したとはいえません。問題点も不備も多かったと思います。けれど、54回・55回、そしてこれからの桂川祭に繋がっていく53回だったのではないかと思います。

最後に、第53回桂川祭開催に御協力下さった皆様、本当にありがとうございました。

毎年、学生が中心となってさまざまな催しが企画されています

秋季オープンキャンパス
８日間にわたり開催される

10月16日(木) から28日(火) の水曜日、土曜日、日曜日を除く８日間にわたり秋季オープンキャンパスが開催され、保護者を含め239名の参加がありました。期間中は公開授業、進学相談、キャンパスツアー、学食体験を実施しました。参加した受験生からは公開授業を通じ大学の雰囲気が感じとれた、などの感想が寄せられました。

前期修了者卒業式

10月21日(水) 本部棟大会議室において、平成20年度前期修了卒業証書の授与式が行われました。

今回の卒業者は、学部、大学院を含め16名でした。

学長から卒業証書を授与される学生

教員の昇任について
今年度４教員が昇任

平成20年10月１日付けで初等教育学科准教授竹下勝雄氏、英文学科准教授中地幸氏の２名が教授に昇任され、初等教育学科講師筒井潤子氏、英文学科講師奥脇奈津美氏の２名は准教授に昇任されました。

編集後記

雑誌の大量休刊ブームに思う

菊池信輝

本学赴任前からよく寄稿していた雑誌が休刊になった。理由は「広告が取れなくなったから」。

第一次石油ショックの頃、毎月心待ちにしていた漫画雑誌が休刊になり、その後も永久に休刊のままだったことが思い出される（あのロボット漫画はその後どうなる予定だったんだろう？）。

寄稿内容が良くなかったのか。「米国経済は単なる住宅バブルである」、「日本の景気も米国のバブル崩壊で悪くなる」、「構造改革が良いか悪いかなんて議論している余裕なんかなくなる」などと書いていたのである。その予想が現実化した余波で掲載誌がなくなったわけであり、それはそれで仕方がないのかもしれない。

また、昔、郵政省の研究所でインターネットをどうすれば普及させることができるか、などという研究をしていたことがある。要は通信料金が下がれば普及する、というのが答えだったわけだが、このインターネットの普及も明らかに雑誌の大量休刊ブームの原因である。これも仕方がないと割り切るしかないか。

折しも朝日新聞社の『論座』や講談社の『現代』やら著名な総合雑誌が休刊になる時代である。弱小出版社の雑誌なんて、よっぽどニッチで低コストでない限り存続できないということだろう。

さて本誌である。今号で108号を数える伝統ある学内報である。私も今年から赴任し、広報委員に任ぜられた際バック・ナンバーをもらい、楽しく読ませていただいた。学内の先生方がどんなご研究やご活動をなさっているのか、特に面と向かって聞きづらい同じ学科内の先生について知るには実に重宝した。

本誌は意外にみなさんの本音が聞ける媒体であるように思う。

これは歴代の広報委員のみなさまの努力の賜物なのだろう。また、個人的にはこうした紙媒体特有の暖かみも影響しているのだ、と思いたい。

どうかこの学内報が経費節減で「Web版にしましょう」となりませんように――。

それにしても、一ライターだった頃は、「編集者って気楽な商売だよな。締め切り締め切りって言ってるだけだし」などとよく思ったものだ。今回こうして編集する側に回ってみると、なるほどいろいろ気を遣って大変だ。ちょっと認識を改めないといけない。

とはいえ、私は締め切りをちゃんと守る方だったので、担当編集者はきっと楽だったんだろうな。

本 ぶんだい堂

史 記　三下（十表二）
寺門日出男／著
2008年6月 出版

明治書院
7,900円＋税
◇てらかど　ひでお
国文学科教授

インフォメーション

清水雅彦 テノールリサイタル

「歌の世界その4―平和を祈る、グアテマラと日本から」

日時　2009年3月15日(日)
午後2時開演
場所　日本大学カザルスホール（東京・お茶の水）
入場料　3000円

◆グアテマラのホルヘ・サルミエント氏、日本の信長貴富氏への委嘱初演を含め開催。

編集：都留文科大学広報委員会
杉本光司（委員長）
鳥原正敏（副委員長）
高橋宏幸　鷲　直仁　菊池信輝
岸　清香